



三河後風土記

四



三河後風古記正說大全卷之七八

目錄

一 产田總光絨心

一 小豆坂七本棧

一 廣忠心逝去

一 竹子代君御元服 附 御答礼

一 神君御初陣

一 今川義元尾別礼入 附 徳田方色配



一 信長鳴海出勢

一 義元桶狭間大戦 最期

一 神君大高沛名卷 附御退口

三河漫風古記正説大全卷七

戸田鑑光賊心

初て義君ハ三河の西郡迄到らせ給ふ所ニ戸田鑑光
也是より陸地を徑て驩河へ入りせられに及ぶ小磯田方の
与力の者多し容易に取らば海上と道りなすに計其ハ分
かるべしと申れり初めは御定して哲州別と稱
甚如へ義君ハ而迄として今川の長尾恒尾を兼守り
御舟六十人の同船より出立りりしに依て浪海の方不
定なれば浪を怖れて船不海をえられに漁船を以て船大
是より上風もよみ波もよみれに甚難風の害ありと



戸田の退士戸田の兵軍兵引連切て押るを甲と情志定面倒る
溜出めとと斤羽の徳を心たさるる六七人矢屋小突伏せ残
ぬるの東也(退る)と隙小穴を切抜て一五で返す。若君北市奥と
奪ふを馳来ると見るより忠定も申すを室も云や吾近身敵
四方八面を退散し一五で返すをちかぬ南に難くするなり
叶はしと返退く忠定何と云ふと返す。然るも不漢流すを
六勝して馳来り馬を奪ふ人上田宗茂一五で返す火之
殺して防戦の跡出さ必死の切先を以て切立に睡りて退る
返す大軍小ぬて馳来り徳光、重信、後部平字十太吉備
子馳来り馬を奪ふを捕る者八村平と市沙呂柄の徳を以て
返す十六六勝のち中へ入ると云て馳入る烟と云て戦ふと見へし

矢屋小三人突殺し七人小と負する。其間小平字山奥小つ
防をやさしくも十歳之防の由依小姓流禰を拂ひて尻をつて振連
く防る小依奪ひぬて居る小と市来小ぬて馳来り平字小
突して平字平字十文字の徳を以て返す。一戦ひし後小平字上徳
小ぬてと市々徳と并居ると市々月と振んと云ふと力足路
危しとつと見ると突て徳の柄と志々と力か何と二川之川志と
川小むけむ平字たると川志と見へると安部と云て振
打ふと二つ小切おりけり。後小市徳光馳来り馬を奪ひて去る
也。飯尾馳来り馳来り長刀柄長く返す。又戸田兵士を以て信以て
若く九人柄の犬刃の徳を以てかると赤女持ると海り合火を割り
徳光は入るとりしと并ハ長刀と并居ると市もかく一徳も飯尾

小つて河や子と掛一村を北朝野を去るくめく矢炮とはたへ五れを
欲しひまふくは織田勢源少ふと春能くはくを去るれと
先陣三子少て固を信てとると豊元一文字小黒相と立て攻戦不徹
固守易く如之信秀此合身を以命信康同四弟信長信実同孫千早
信次兄弟三人獅子れ忠とが一云甲斐守如者大に我に云て守り
返して清けくくと下知を信とて赤川長谷の神戶市を内反
藤助川尻之信同と四弟信長武後三位入彦小瀬清隆を更進
沈川清侍助友徳大肥源盛の通今櫻會大久保業忠 大久保守 永田
甲斐守千早家各獲屋清守千早也や声少て返して清助獅子今川
勢入割て入黒煙と立て去戦ふと勢電光の如くめく七條の信
是と千早朝はふと千早春秀道兵三子千人部之月の子は下し

清と様へ清ゆくと下知を信とて赤川長谷の神戶市を内反
藤助川尻之信同と四弟信長武後三位入彦小瀬清隆を更進
沈川清侍助友徳大肥源盛の通今櫻會大久保業忠 大久保守 永田
甲斐守千早家各獲屋清守千早也や声少て返して清助獅子今川
勢入割て入黒煙と立て去戦ふと勢電光の如くめく七條の信
是と千早朝はふと千早春秀道兵三子千人部之月の子は下し
清と様へ清ゆくと下知を信とて赤川長谷の神戶市を内反
藤助川尻之信同と四弟信長武後三位入彦小瀬清隆を更進
沈川清侍助友徳大肥源盛の通今櫻會大久保業忠 大久保守 永田
甲斐守千早家各獲屋清守千早也や声少て返して清助獅子今川
勢入割て入黒煙と立て去戦ふと勢電光の如くめく七條の信
是と千早朝はふと千早春秀道兵三子千人部之月の子は下し
清と様へ清ゆくと下知を信とて赤川長谷の神戶市を内反
藤助川尻之信同と四弟信長武後三位入彦小瀬清隆を更進
沈川清侍助友徳大肥源盛の通今櫻會大久保業忠 大久保守 永田
甲斐守千早家各獲屋清守千早也や声少て返して清助獅子今川
勢入割て入黒煙と立て去戦ふと勢電光の如くめく七條の信
是と千早朝はふと千早春秀道兵三子千人部之月の子は下し

ありと據りしより成れぬ不任先討死して又後へし嶺平御極首
と幸小終りしより初屯臨高のぬき走り甲冑ハ血槍不深こ小
のさつと小終りしより初屯臨高のぬき走り甲冑ハ血槍不深こ小
川尾を三指回今四指流武後小津川流古肥久保水田名護屋城
初名宗子と命とすこと責難ハ朝比奈の傷受し信先討死す
又へたる也織田信康も其助あり斤福の徳を返す死す也
現る人数踏みあつた時と陣不併。関の声左刀者ハいふ方の徳所の関
争も是ハハ互しと又へたる也終り小三指り人数踏みあつた傷中
泰徳も其助と心者多也波を破る勢ひあり存方一文字ハ
池掛ハ小三指見小元と終り據りて其声とくけて責難ハ流り
織田勢もつと終り三指引退信秀陣へあこれと終り小終り勢

據りしより成れぬ不任先討死して又後へし嶺平御極首
と幸小終りしより初屯臨高のぬき走り甲冑ハ血槍不深こ小
のさつと小終りしより初屯臨高のぬき走り甲冑ハ血槍不深こ小
川尾を三指回今四指流武後小津川流古肥久保水田名護屋城
初名宗子と命とすこと責難ハ朝比奈の傷受し信先討死す
又へたる也織田信康も其助あり斤福の徳を返す死す也
現る人数踏みあつた時と陣不併。関の声左刀者ハいふ方の徳所の関
争も是ハハ互しと又へたる也終り小三指り人数踏みあつた傷中
泰徳も其助と心者多也波を破る勢ひあり存方一文字ハ
池掛ハ小三指見小元と終り據りて其声とくけて責難ハ流り
織田勢もつと終り三指引退信秀陣へあこれと終り小終り勢

時十七歳
又忠利

下方孫三郎匡範

海也主船しめり時ハ臣

先小馬と云ふは是を以て織田信康織田信元位康田四郎信元
信元同孫十郎位次赤川義直は神戶市原の内後尾助平子中務
川尾与信同と云ふは武后之位小瀬川勝七肥大久保林望因勝
川と初と一も必死の切先と云ふて返せし礼と云ふは余人と云ふ返せし
悪徳と云ふ是の如く也ハ信と礼と今川勝元の所へ捲り替る
是は小豆坂七中勝と云大勢取らるる所を敵方奪きて下志
まぬ九中勝を越敗軍と云ふ申ふ事不承此の成敗勝り勝り此
印とめくともんし惣右の旗成名代と云ふ石川清兼と云ふ事
中多平公常忠と云ふ柳原及信長長政林原及信少林源之助中務合
す一此今勝地と申して証する是は長政と云ふ中より返して
時合ハ勝る尾張路ハ印と云ふ事也息を絶せと云ふや声と

責掛る信秀の先伯礼と云ふ武后之位勝引提と云ふく多の事
十余人密偵る今川方より小山の極成又男左衛門右衛門格かきし
久けり返して我ひく勝切られ方力を振んと云ふ事と云ふは引組
と云ふ事と云ふ事武后上あめて後不首と云ふ事と云ふ事
之位ハ少衆と助と義ひ居て引退く後不織田方敗北して織田
信康と安祥と勝と云信秀ハ清洲へ向城と今川勝も徳川家へ
武其まして駿河へ向る信秀尾羽へ向る軍と云ふ事と云ふ事竹下代と
討殺し再大軍と引率して是勝へ責寄せ世一の戦と云ふ事と云ふ事
亡き我勝不亡き事と云ふ事運の程を証し加後景書と下志して
竹下代君と害せん早使と云ふ事と云ふ事不途中まで平子監物清
秀小川合より清秀何事と云ふ事と云ふ事不志りくの中と云ふ事と云ふ事

終に吾今位秀小まゝして是と誦し 年子の石石はるすてハ
後へしと押さめ清秀ハ馬と花して清洲小島りり

叶年子の位秀小誦し 男之一年位秀一家の老を命と不和の色

者多し清秀は誦し 和賸及至彦子 益中者し又此

砂人語て祀子と并返す和賸やふるへまの苦く若く清秀扇を

穿れ神ひちて 鏡ひ水此水れをとまき今日れ 風やまくらん水の

まけし親和の務と互るは砂人の不調法も 向ふさう死を後

信長不評誦の者清秀ハ信長の乳兄弟有誦言して自害也

位秀卒すと見て志す、れ子御と云ふ卒と評て君今一旦の

想のよる竹子代と云害ハ廣忠祓に皆腫ふ入て命を控て黄

来るへし徳川家小物りて毛く小島らまを以て今川義元の助け

有

終時ハ高家の一大事小て乃古人も仇ハ忍心難せし中よりハ

以て只今より 松も竹子代君を厚く此此を有るハ子と云思

親をりれ、廣忠恩貴れ為ハ是終ハ心のまり美と控て隆業ハ

るん計り終しよ、和賸如れ少もせよは君ハある限ハ高家ハ萬

て子矢とハ是さるまじ 終時ハ迫まを切腹ハ誓ひ勝張大ハなすは

ま時招きまして徳川家も 徳ハるん依て竹子代及と此此をあるハ

高家の者多し、云害をハ、只少かうしと 誦言は 位秀始心して

此ハ誦言し叶へると例ハ控用ハ 悪社人との竹子代及の此此を彼人の家

ま介天玉坊百松を句と、云信との由多事と云ふま世阿古居の久松

佐後者の方へ由再誦者竹子代及の由母君侍在院及の由方へも使

と以不思候のり、あて竹子代及を奪取、り多智も精由るを、云控

ありけし後、甲の多信も猶も此所、對面のも、い、逝て、乙、多信、其、
中、乙、甲、送、久、松、ハ、信、秀、此、籠、下、あり、百、多、下、も、け、中、と、下、名、
と、多、下、依、て、中、母、君、と、婚、多、女、中、小、思、百、多、孫、と、初、小、乃、具、等、と、
中、子、自、中、可、記、や、し、小、一、乃、思、先、と、上、年、冊、久、孫、竹、内、久、六、と、子、若、
と、甘、多、中、心、の、及、不、と、と、と、此、れ、は、れ、竹、子、代、君、ハ、益、甲、と、ク、中、成、
長、が、と、と、と、い、は、し、神、君、ハ、中、福、あり、たり、

けし、時、是、後、表、少、ハ、松、年、内、信、信、之、松、年、孫、人、信、孝、酒、井、が、監、忠、尚、
大、原、在、迎、た、と、今、付、侍、中、御、藏、田、子、と、して、飛、下、り、り、中、少、ハ、信、定、
ハ、家、臣、と、な、り、上、和、甲、の、三、度、忠、信、備、中、中、此、槍、多、信、重、次、討、死、し、て、
到、藏、田、信、秀、も、小、豆、坂、少、て、後、軍、有、新、羅、地、藏、田、家、の、武、略、と、
大、掛、多、此、和、尚、を、殺、し、極、く、院、云、と、あり、是、後、少、と、極、く、評、美、者、

り、天、慶、忠、ハ、西、病、死、の、上、ハ、と、先、と、の、罪、と、免、さ、れ、再、降、命、せ、し、む、
之、本、の、孫、人、信、孝、是、と、と、て、軍、機、と、奉、し、是、後、へ、攻、掛、ら、れ、酒、
井、政、親、石、川、清、兼、酒、名、代、と、して、此、向、ハ、大、掛、多、表、若、生、川、原、小、
て、終、日、一、就、小、信、孝、討、死、あり、酒、井、忠、尚、大、原、今、本、も、難、け、し、
と、て、終、不、降、命、と、依、し、之、別、再、年、均、出、と、上、天、文、十、八、年、三、月、
三、日、藏、田、備、後、守、平、信、秀、尾、別、清、剛、少、て、病、死、の、中、と、之、別、小、信、ハ、
此、れ、を、是、後、此、後、士、各、坊、の、如、同、年、六、月、六、日、度、忠、ハ、西、年、廿、四、歳、
と、て、中、逝、去、有、依、し、一、家、中、火、の、消、ら、れ、ぬ、悲、ひ、悲、し、り、大、
掛、多、小、道、り、葬、守、る、瑞、雲、院、殿、應、政、道、幹、大、居、士、と、号、し、中、侍、
天、安、元、成、子、年、大、猷、公、中、侍、代、百、年、中、名、の、帝、賜、二、位、大、納、言、
大、掛、多、殿、瑞、雲、相、應、政、及、幹、大、居、士、と、中、侍、り、酒、名、代、松、平、

新中より大久保を前守由事新松平より敵に由縁取立山に助
於此に常志の時時勅使下向より敵に由縁取立あり

廣忠に頼まの後に由家人評定若君藏田家より分りて加藤
信秀存生に就て兼署おし居藏田へ降参して若君と交り由家督
とせんと言も有又世々の武勇藏田を部し居るも今更降参ハ
とて由家門の内にて由家督と定めんと云も有廣忠は由存生藏田へ
降参りて思召と申し又由一門由家督と由嫡子と云も有今川
へ訴て奪返す計畧も有へとも方て評定交せ居る程と云
ゆふ元是誠少朝比奈由中守是初以由信長移居せし事と云
出今川は廣忠死して竹千代尾張守有若し信長が竹千代と見
たて居流へ責めたりは由川家の信長藏田へ降参りて時ハ藏田

勢ひは元は敵へし由事多不流向い居流の城を守れと下知方不依て
三將千三百人居流へ参り今廣忠は死去城中の憂小云て藏田
勢力責めたりは志は城危かん依り加藤の人数を送りてと云入
て中丸を守り依り由家人是此の流改し不及今川へ送ふけと記
尾州信秀死去不依り藏田武勇も信長と初信秀二男佛野信長の子
信長は知名茶釜由曹子計時十六歳卒生仔是凡流あり今此元
信杯を成ると好む少居相人こそ諸老臣と初皆信長と云ふけと師也
信長と初昔捉て居て一七日此信長者不信長ハ飛間の程小者かりて
寺へ引去り家老た参りて来て世々の唱へ由家中に思わく一寸と由燒者
と爲と信長は信長退身ありとて此を七日の法事終らんと云居居
交り信長は信長いふありとて返さる押付法事河と居るを云と付

信長が其の爲納戸へ入りし小鳥帽子が着せ給ふ。信長是を投擲得て
陣の陣羽織を令めて血を付くると投擲元後を切て大章を成持陣を
引提言實へは此れは依兵の二百人許揃ふ程で馬川を動ふると并余作の
陣と馬の卒有る引付者も居りけしと一さん小強此らに奪りて、信長此
所へつて右席を改請し任付し也。居て信長は此れ海へ地
ありや吾も亦敢し左右へ云新もあく信長は換移あり不及び位得小
字に掛香と一つく香炉へ掛入一礼して急がけ小馬を并馬も第とく此
法剛小垣城有る右階より法一門家来の教を教え令し去小強に此
法中悔て後梁田出陣守苦く我氣色ありて信長此處へ出陣ハむさ
らと好く今左へ移し小強忽ち君父の吊ハ大礼を此の哀哭の誠を
言して連織田家も亦家督一人も重人し小強は移して社へ移り

終つ以後は市情と諒を言信長の云外の家老もた然し存するや唯
出せとして平手監物林作左守梁田槍六舟附を左邊へ出せし
唯今思室長つと第一梁田出陣と今移し諒を言海も如何存も
之何思ハ何言口と揚へて左移しと今移し諒を言海も如何存も
運ふしと知少ありて父も難れたれ海も如何存も
思慮ありて智慮ありて第一梁田出陣と今移し諒を言海も如何存も
へ此子印者凡あはし時におもひしや。若世上左平此時海も如何存
むとも云へし今戦士のうち中と放て右も左も運つて何の親子の
又さけし何思中も女者しと一つ小強を泣きせし死する父上此種生
者へさや父の別々想へしと一門一家善抱下之方なきと今移し諒を
又遠し或ハ敵同者も思考あるり又此中の大章を幸と謀反

人杯出でて法則を争ふ所を先祖月窟力時より子幸百苦して
草創者しけ城を忽他人に奪取致へし其時黄白氷の位考連我
子に柄者して父祖の粉骨を以て切取ると竹地を奪取られたりと
恨をりるる所や戦玉の考りは今版者の尾別半園を切度先
般ケ玉の太守と成て先祖の御家と成れり大考に其時の子信
義僧此道福作信心の依り成へしケ根の理を念ふ所油小所ての時を
恥けそす玉の政乃致ふといふ所南家の滅亡の根もわくと恥者められ
先序の面を在而閉口は是より信長を凡人か他を家中奉てそ致
すも後信長下知者なり南家小成て父死去せられ思務の度忠も
死去とす彼家の熱心竹子代を信長の方へ奪取せられ是を奪ひ
取んと計畧者なり計をこし油小終るおせも柴田槍去猪家小成

人教子五人ありて孫を以て信長内言ふ百一子小勝る時に密に教せし
るる法法信を招て信長の方へ竹子代を奪取し其思務して度忠も
死あつた家中の面を以て南家へ送らんといふ今川へ志を以て評義
更にお世を以しけ時を極さん和睦するを云送り同心ありあり先
竹子代を以て先立して思務へ出張せん徳川家の徳代のお天はと目を
目人小對して引引きおつけし子小汗せん其時西三河を以て系小成
用立せしこも父へ月若者して今成今川系元を以て命して竹子代を以
奪取せんと人教沙万ありて出法を以て河を以て信長徳川を以て
名小ぬを以て命お阿らんといふ西三河安祥小あり吾兄の三布四布
信廣を生捕て人質を取せん其計を成り人志し信廣を生捕れ
たハ家小成て竹子代を以て替むハ叶まし油小終るを以て而時小成

安祥ハ尾別ノ乃不記奪たり。是時信長ケ竹千代と先不立と岩崎表
へ出陣セハ徳川家ハ一族譜代ノ老臣人ト向テ弓と引んふと若此必降
糸せん信長也と先としテ東之河ノ至昔ノ老と討果し南へ働
んと討之し先立者時ハ人と割也今信長十六歳也。向テ軍ノ諸員
不可知也元時出陣して尾別横田(喜多)ヲ滅田(喜多)ト一戦し竹千代
と先不立と若し討果す遠をば横田表と責破て竹千代と討之
岩崎譜代ノ老と追放し岩崎と奪之。後尾別と之を討し討之
いふと評定も岩崎長老をこ出只今此天理不討之。然も君も若
はばふと奪之。尾別と水手不立(水手)計畧す。又竹千代と奪之
返さん。計畧す。水手若し竹千代と奪之。計畧す。水手若し君出する
不立して其小人殺之。被り下へし。悪僧引地向い竹千代と。安し。中

奪返して予君ハ時評と此評主也。此後向者大切と。予不立と
得而も知、此中此ハ先元方不脱也。此則吾命也。大將とし人殺
沙予本人定之。竹千代ハ人と流され。時評不立。天文十八年七月
下旬、破別と。予立軍情と。之をめて之。身ハ山中不立陣。先陣
ハ岩崎(揮)と。吾命別岩崎へ。而て中。此ハ先陣我命也。命と
返す。竹千代と奪返さん。予不立。大軍と。率して。後向。是全
命元一言と。金石のや。此後。此ハ岩崎譜代の勲し。死力を振いて。御
進す。御。安。此大將と。初。多忠。言。大久保。新八。命。多井。伊。賀。河。井
將。命。多。我。命。と。先。陣。と。命。不。立。と。岩。崎。不。立。先。陣。と。命。不。立。と。
予。後。將。命。と。命。不。立。と。命。不。立。と。命。不。立。と。命。不。立。と。命。不。立。と。
此ハ。岩。崎。不。立。と。命。不。立。と。命。不。立。と。命。不。立。と。命。不。立。と。命。不。立。と。

法為尾別へ後向の香南下の城小何そ押と云々や吾亦若て云
今尾別へ香南下の城小何そ押と云々や吾亦若て云
難し幸南土安祥の城小何信長は唐尼織田三命五命信長と等
言てりい若く生捕て人質習と信長へ云送らん然時信長言是非
人質を習ん心定て別是等の兵と先陣と一陣の朝比奈保中
同也言中と初として信尾豊茶もふ下知しておろす未明小何と
安祥小何多たり城兵僅不七百余人と云云信長先陣の
勇將多れ物をもとに士卒と師し強弱を極め城のさりと云て
一文字小何を出さしめ先小馬とをめて大馬揚士卒と下知し
城三日脈へふふハ信長は後詰ありハ必定し菊の者不憚る云
小何死す死すハ大馬の法馬は平首小何分て群る大軍一面

ふふ切て入馬や声をとて黒煙と云々押あく戦を云々入るらぬ何
志と云けん先師の徳川勢退と云れ云計引退之中より淡草の
甲冑令へ麻子れ首立物多々命忠言と名をて引退せハ前幕威の
強と云まの甲松首小何命 柳原茂信長も同て退し澄れらる
詔中へ馳入て言ふ取れかしこ小何ハ是小何と云て之何勢大波は思ふ
首て退と云めく二命と吐と云て退すハ時難ハ小何立られ礼足不ありて
城門小何入らる忠言終り賢いと士卒小何言て命不成り退と云ハ
云しと城の地ふく退新退入火と散る信長は前詰信長と指ひて
今此命立物も武者と射五丸と来て四人法十四束と命をとり將初トミ
して甲の尻庇射碎地腫を破り穿て碎北鬼和と云へる忠言と命
小弱り去送脱と云ふと命二言たいた死すハ 二十 命と云首取んと

池樹の柳も同じとて方小思り大月の影よりと振る 迦戸ぬ原弓
ふるふるたれふせ鬼神と欺く御して忠言の言を揚させん前傳
次り二の矢長政のせんんの板を母衣をきて矢先白の射をん然も
中右左松平玄蕃同右京松平助四郎同右京中多忠後す小栗助信
河井小五郎石川安藤同右京村郷子三郎同右京八条津波藤中
橋守玄印天龍志右門多右伊賀守大久保玄左衛門と初まりて寤る二別
機り五子之勝馬を放し機を振て或は堀又ハ石垣地をくを宗誠死ぬ
やくと叫り泣く機地はけと玄蕃宗誠を振て時敵一時小栗破れと
惣軍とて然れ、不叶して一の木戸を掃破り、玄蕃別火の多と上
さけ二の丸を攻破り、その時小栗と信へ敵の大物切腹せは兼ての計
畧詮方と記す、廿九と九圍に大物の櫓ハ人とのしを大物信廣の

由事ハ尾別へ中を一人質替りて流と叫ハ小栗は時信長ハ安祥と今川勢
五圍むと少佐洲と并立一勝くけ小栗海と二の丸を交り安祥小栗の上
信長柳子此忠と云、甲斐の信長を殺せめて三日ハ肺へんと思ひし
中栗を振り、牙をかんで立腹者如へ、平中移カ、林直海り方一羽は
京内中守方分今日安祥と責成せし、依て三郎玄蕃及既小切腹
者へ、此中右去先平中を責へ、此川を、竹子代及と引替りて、海は是
信長評定方、付平中評定、依り信長止事と故、是して、回心し、三
別、西江と人質替り、場布と定む、善君とは、織田玄蕃同、却解中
道り、事ハ、信廣とハ、大久保親子、殺せ、て、双方難か、引替り、
善君、是勝へ、求む、信長、及、今、酒井忠尚、大京左、道、今、村、信、四、郎、也
皆、長、今、時、集、事、今、活、吾、麻、中、今、竹、子、代、及、今、何、皆

義元の忠義に仰年々として供養を礼謝せんとし自身駿河へは来
ぬべしと申す事以下駿河へ引移り流老臣も尤と思ふべし
其年十二月十日沼井將樂中佐依りて駿河へ移る 義元は
石川原の駿河少将の官所 三三不不新小原殿と撰へ此地を人の
福語大信守正資一可事 正不自中而能執中と此地を有正家長等
信守正資元沼井石川木の老臣と招南村竹千代知少少て信長之右
戦心許知し依り云河と信竹千代成長と義元新竹千代と三三
依り是務の城代ハ石川右進在能大務有人勤へし是務を以て惣
い多居伊加多忠吉村付の役人をいふは是務三三不不居伊加多忠
正世の如く流老臣と評しひ其年一の正定ハ毎年妻小のて駿河へ
立神へ来不不中事白屋竹千代諸事の入用ハ是務より支給ひて

其外是務表は流老臣の妻子と自連駿河表へも詣りて三河木へは今
川家より侍大将と撰りて送りしれども少も其世に与りては中流木依
て者大不難ととりて若君を人望有下知不従ふと今川の時も
信長同前高家直末小節し 其れを以て流老臣と中流木を以て今川
服はれ九若君の由り大上大切有言と押甲有り物是務の面々
駿河へは石川木今川の下知と背するなり其毎交義元の軍政不
也其江治元年乙卯義元尾別解甲に城攻め時大久保新八忠利
日七下なる忠世同流老臣忠佐出能中事書印忠政松浦八郎五郎信貞
其子八十郎信長と中流木の事なり
多居伊加多忠吉村付の役人(三三)流老臣(三三)不不居伊加多忠
正世の如く流老臣と評しひ其年一の正定ハ毎年妻小のて駿河へ

きし君君の内務を遂し内務を思ふ内務へ法若君内成長の事法士
と抱て時の内用と心を不及ぬ事内信代流い今川家より多の事信さゆ
故あはれまじ地御不ぬ事信まじ事子と信さふ

弘治二年丙辰正月十五日駿河より竹千代君勝元勝加冠今川義元
理髪内國刑部少親永 國は義元の
伯母年あり 義元の一字少二居言仰元信公と
中より義元の姫親永代息女と元信公へ嫁せらる 後築山
即前記 三河吉田柳原
兵部丞と少若一子胤麻毛と少駿馬とをよけ義元外將軍義昭公へ
槍奉け馬と鞍上履御内書不 松平義人ともへ有見より義人君と
稱す同日二月十日三日日進の城日奥平久盛今川と皆く義元
の命あつて内名代として 松平高左衛門義春少五人より向ひ駿河新川
義元日城中の玉子中りて死す於其尾別より 宇田若尾川新八年五月

騎よりあつと安政甲子信長改元助ちまふ突然其務家 宇田
信六子負
尾別へ引退け時首甲之種河へ送る義元機嫌不辨 元信公侍不
申ししとらあ向て内名御少あへり南玉へ御し徳川の武勇横言せん
と心苦お思少知小女初め泣を有定てけ申と少るし我一ふ天下
小旗と建人と御と能言言小言んて天下小切を言らぬすと使
然るるお旗と之を時 神君をらと内言有らるる 彰小内親息は成
まじしと内信と為しあひらると義元見知れ元信は何れ居居派小
及しと 神君かも難さあはれ兼て義元公あし知し百と、吾う法康
子幸万苦と心 溯先祖の基業と加やらしぬ内信の吾う一族内信か
不義小依て父廣忠々時不意押服不意とを弟も 可く小通歴仕し事
義元公は寛仁の内信より 溯三別へ立歸り半玉と御し以て不音響奉

て伊予を子孫に刑罰を命ずるに子孫數多由合す中守の
城に於て日向守を命ずるに今川と少時織田方へ随ふ公別
酒井石川松平の由一族に傳代の由とて百連永祿元年
年二月九日妻さ^{けり} 日へ逃合討九首百奈級外曲端を
放りて世傳今川へ由流るるに御時傳海寺を命ずるに九首
百首計元の方へ出られ今日初て出仕を然し元信公の由流
るる由傳を首捕と命ずるに元信公の由流るる中守の由
命ずるに今川へ由流るるに中守の由傳武勇を命ずるに
今川へ由流るるに今川へ由流るるに今川へ由流るるに
唯傳流るるに今川へ由流るるに今川へ由流るるに
今川へ由流るるに今川へ由流るるに今川へ由流るるに

川家小妻をこれ信長めく傳るるに今川へ由流るるに
見しと申すへ返し然るに虎を子里に放りて若し往川家不
の志を懐記南家小根と結んと思ひ織田と和睦して大事
とて申すに元信とてはてて大に驚き悔て云後トハ何せん
吾亦悔工まつて往川家の去傳を討るに一方便に彼叔父水野少将
信元織田家の味方として尾別石ヶ瀬小城を獲入を信元
下知を傳へて石ヶ瀬をまつるに板子と由流るるに二心あり
取んが元信は信元と評定方をして之別小下知を傳ふ
元信公の臣ハ元信數年の我信通は言今川の事を難に織田と一
志す見ゆに之を命ずるに多へ之を言はしめしむ傳ふに指
名人傳れ道不此とて公信なるに由流るるに一理者なるに流るる

源で源と源とをいふるあり信定が方小頼のくもぬへはかへ極子
一族れをきつハ義元の思之わき恨小大義と云れて何ぞ道と云へ
まわさ今川小智長多しといハ我ホウ心腹を探らん方小下知と
そんちうハ我ホ実と云んはへ一就せんは長下の源を用わたり出陣方
水地信元ハ義年此元信何れの方ハあん敵を城へまては信長ハ
少白依父婿の好男ハ私の方ホきてゆもて地ハ利ハ擧ぐ出陣也
公志ハ先小進んて信元ハ兵と退るる
此ハ後先を擧げて馬カ左腕をつくは 信元遠
城へ逃込討ち共七族五人今川へ河原を有義元方ハ快観ハ晴
たうして山中の由急の二百貫と返しとあせ腰刀を返るる依之上下
快男む程を誠ある由志と今川家へ知しめん織田方の城度濃奉
女梅々坪構保ホ責むハ中致者ルハ一五此源をく由下知ハ方

孫吳ハ肺肝をゆさぬぬハ敵意ハ利と云んは信と云んは味方と云ん
永福二己未年源河をてわの由善美由誕生竹子代君を秘ハ是
源の才九太守此照ハ大なる松あり之を中居松と云ん由知少ハ付ふら
梅後ハ中

三河軍運 孫ハ云清原ハ武原ハ善ハ是と云字古也字子
源院と云ん足ハ一足後城下源海院 輝と云ん人打音ハ梅姫何
子出りの事とけ事と源ハ一和志云別し言ハ一源ハ由一人梅那ハ
何源ハ何事し是ハ字ハ日の下ハ人ハ合字ホて空ハ現事ハ
事ハ日ハ光ハ水ハ由子源天下ハ將軍ハ人日ハ下ハ人ハ三子ハ
三代ハ内必將軍ハ源ハ一さう月ハ下ハ母揮切 人ハ云ハ天子
と降下ハ將軍ハ何してハ何し必由子源関東ハ由源と擧させ

これ武徳具照堂の如月の如武乃と信乃の如く一と列生
仍て湯井雅本介の如先祖の中法也考之とて新海院の且形子
せらぬ今これ世に新海院の如の字を信乃と梅とを
大平の如法記の如の如と云ふと神乃の如を不而の如
と信乃の如を不而の如を不而の如を不而の如を不而の如
とて若千の如を不而の如を不而の如を不而の如を不而の如
東照宮の如康公天文十一年十一月十六日三別名法乃の如誕生
台徳院の如秀忠公の如天正七年四月七日を別法乃の如誕生
大徳院の如先公の如長九甲辰七月十七日武乃の如誕生
常憲院の如徳公の如寛永十八年八月三日の如誕生
常憲院の如細吉公の如正保三年正月八日の如誕生

文照院の如家宣公の如寛文二年四月十四日の如誕生
有章院の如家継公の如宝永六年乙丑七月二日の如誕生
若家公の如貞享元年甲子十月二日の如誕生
注川家の如武勇令川家の如武成徳也して尾列智多郎也
美元小随の如信乃の如掛大を美房の如城將の如美元の如妹也
長助長持の如信乃の如天々也美房の如葛山信守也勝喜
爲の如武田晴信の如父信虎の如注河の如北條在京也氏康也
子取也印氏矩の如人質也して注河の如区也美元の如娘也
春信の如激田信長信老信の如美房の如宮の如美元の如甥也
智多郎の如大方令川子房也美房の如美房の如美房の如美房の如
我多難也如人也して梁田也田の如云先及の如要害の如也

糧へ欲し御之自由あるため久大なるの城を以て兵糧乏しく攻めしむ
大坂より攻めしむるに要害へ引落り欲しむるに於て出陣地を奪
むるに糧小計策を以て近江北信より舟へ加勢を乞ふに後足利は
信長に同様にして使に馳せしむるに本義秀は加勢を乞ふに大坂より舟へ
馳せしむるに後足利は丹羽の岩より永為常力忠度山口海老之庄
廣憲松林玄蕃善亮左殿と大坂よりして三百石程之糧を旨照守守原
佐久右左衛門尉信成と舎弟左衛門亮親成と二百石程中津渡守原不龍川
平屋の主人清田右近長親と沙石五十石九根城小佐久右左衛門守原
山田左九郎重親と石五石程勢守原不龍川尾近江守公致織田玄蕃元
信年五百石中津渡中津渡海老城へ山口左衛門守原家の子守内膳
と之の少少の糧を毎度運送して之城を以て十城信長は守原不龍川

右より兵糧を以て此の世は然るに九根の城の守の先あるに其の具を
吹くまでしむるに其の糧を以て少くは幸しく廣瀬守原不龍川に
へ強けしむるに中津渡二城の兵は然るに九根へ海老城より中津渡
海老城より其の糧を以て奪ふに其の糧を以て奪ふに其の糧を以て
奪ふに武田守原と隨て居るに其の糧を以て先尾別は信長を
打ちしむるに其の糧を以て上んて人を以て其の糧を以て永禄二年四月七日
大坂此城より其の糧を以て長持人の馳り城に兵糧を以て其の糧を以て
兵糧を以て其の糧を以て只二三日の糧を以て其の糧を以て兵糧を以て
入す其の糧を以て其の糧を以て山口左馬守長子守内膳より信長に其の
下知して其の糧を以て其の糧を以て其の糧を以て兵糧を以て其の糧を以て
奪ふに其の糧を以て其の糧を以て其の糧を以て其の糧を以て其の糧を以て

山口父子は今度藏田の今川の方へ亡くして一處に内蔵して
家と起さんとお後から大言水掛の属さずも徳ある所と
うや伝者のいふと多分も知りたる義元の内閣と伝

評政の徳と時別と移り知十八人の属して初款せいでふ
と挙げ厚書とたゞ傳設ぬらん交へ兵糧とて入る我ら力不
難叶とし義元此後として吾等を呼ては又お後も義元
兵糧と不送の兵助と控敵し出陣の用意全う候叶るや何せん
吾等云々小室元の人あり徳川の務人元康小室し後へ某つく
けんとんく小見人中の務ありて人の小一せとて送人小あは令略
の濃あり小室を早く見しと害し後へ去かく衆多候不傳を加へは
徳川忠成親屬勇士根を合んで其の根を成へし幸い此難地兵糧

入の事の中は祥退あるは大なる下知の背罪ぞ切腹させ義元あり
兵糧と入んと更合つぬは月用意して傳設る方敵中より討死必定
あり不入れ相おさる討は味方の毒を去け半ハ叶ふまじ祥退を討死
二ツの中おんと義元心候也 神君ハ^西年^{十九}は時義元の信使候
種河へ書付られ別出仕と出たふと石川清兼ハ西種と扱へあはさく
義元の大言兵糧入の風流を義元命をうたふ更させあふ
入難きるへま 神君うかつき泣ひ出仕あり更云は及大言兵糧
入武功の面も後付られても何れも祥退とけ上ハ徳川及武常と以
兵糧入兵糧の介せし祥退向く西更あれとて時 神君宜く
見物多記軍物の中若輩此某小一大事の兵糧入と令せふと
幸も時お流ての面目へて西更者を退出候ふ由家士待是候

と伺ふ。神君は家老藏酒井雅楽介政親石川安藤清原酒井
將監忠尚曰左の厨次等小は位出らるは交眉目小成へき大事と
儀元令せられり保面くる言と申小放てはけり叶ふ事何事小
ても我ホカ申小悔ふお小は汝ホカ申小悔ふ事何事何事何事何事
三河人揚り南家へりといへきとの位各作天しよの位俸あり
免角位任下はと給ふ神文は任下とい何も畏る事申小
大なる兵糧入りの申者酒井石川も是時儀元申者丸の玉申人殺り少
得後けたる款の要害叶難し是申ハ直禱退はれり申せは前御
此神文いいうちと字を左面と聞は是を申小儀元小為後百幸正
並四百石儀元送るも時松平左衛門親信酒井雅楽介政親石川
を七帯料正といは申て汝ホカ申小は任下とい令し給ふ三人外人殺り

余人と召連て八日の夜申小打立りり川邊で 神君は遣兵八百余人
小兵糧と小為後小命を自り小為後の儀を一と小申下知あり先ッ兵
と云ふ右一儀と曰武のめりて三阪目小傷へさせ申陳の申小兵糧と付し
小為後といふ五目小似たり一儀の間申聞と隔て兵糧と申小右儀は
弓張炮と聞令せ款様令より討て掛りハ右の多して渠と押へ次の一
手ハ横槍を入へし極兵儀は我小申も不極小為後と申小護したの
前後二と申隨へ申置れ款様小為後と暮るん小は左の多より救て
款と討て右一と申入置れは心とい左右前後進むと申小知
何と申よ首ねは久久保七帯を申年若七之助柳原七帯を申申多
吉原の 大原左衛門内左衛門酒井將監ホとい位舟大言の儀此
申余所銀の誓とてして扱へ申左様小永福二年四月九日丑の刻申小

九根山田原に居る秀親城に付佐久間大守が五十騎を誘ふに
より佐久間信成が我々と強き明松の光る中津田尾川
に卒に師し味方の八方より馳せ来るを以て敵跡を尋ねて馬を振ひ
て御如く思ひもあらずぬたのち分たるが親信は返り八右衛門正徳安政
甲子五月廿三日の事云々百人伏兵起し聲を發して中軍小突
へ入七將八傷して妻身は酒井石川に於たりやあふと掛立く妻身
も小沖原の磯田惣兵衛立らぬ脈へ兼て城中へ進入すを返す二三
の丸を揮破り火を掛て焼立短兵多し妻立らぬ本丸一つを以て
費かしく居る所を酒井下知て敵の敵大勢迫りて二人を殺し
將に川揚岡より引返すは時勢は方此磯田方強けりとも
を中津原に居るより引返すは横たつては出さる事とありぬせめて

焼立を折消んと誘く如く後多し九根のあ隣より返り合ふて只今欲
方太方の城へ兵糧を運び入ゆとも味方小勢ありてくも物
志して居る多し此所人殺を返さるべしと云ふ信じて是れと多し人殺を
川返さんと申す火を消さんとて指子よ水よと誘て上下混雜時此
免角して人殺を奪ひ強けりる小丸を兵糧入り終り徳川勢は引
返り磯田方の兵八瓶程小初されし心地にて此誘はる計に於て
神君の思召の儀小兵糧を入候し人数を以て川に返卒と先小立後
陣を揮て川上ありて要害の地と云ふ由て傷を設けふ酒井
石川人殺と川連一丸を引小立候はし神君完ふと申すは此の
正徳親夜申し御初め一敵も先立川に九ヶと申すは酒井
石川畏れ候はし款ある由り申すは先づ由縁上ヶは此

若くは款慕はく我く三防を甲 神君宮ふ想て苗城兵糧入此化
のそらんを困るの一言と忘れたるも仍て酒井石川両先より 神君後
陣へ減田方より入進みたる依之人も換り苗城兵糧入此化
川をえ方へ出仕者兵糧を尾能入初を是之是全義元公の直武
常と宮ふ義元も互いいうふと者も時々柄く 是れは是兵書
の所謂を而さういふ事いふも兵と曰く中心を以てありと
は信守退者義元彰るる不卒中して 是を命と招れ和信法
二年一え庸 是常此者向うはと流く是と保されも 我物の教も
思ひより即終小付交大言へ兵糧を入るるは源義ともて欺
若量者必後の事ともぬへ之連保の御弱成る中も教して
後去と心易くせんは款慕と吾等も不押留め信左の由る

かゝる彼と功あれた罪重へ起過ちかゝ終と今此乃を而害しかつ
けな市出陣の形か下百集る 味方の信守君の印者並に志路不
るととれんは終小付交大言へ兵糧を入るるは源義ともて欺
若た果而此と人と苗城小報は是之想て減田家不降集せ
あう起る先つは交は其事なく助重れ 是終の戦ひ勝て後之を
講しぬへし是を元康先と云ふ向うは是武要信人見と云ふ
心と云ふる而も由りて暫ひ望んぬへは是の城は精長長持
と由保習者か 彼人の能と信人小知しめ終る事ありぬと 孫三
は此の義元同心し 別下名と信へられ先大言の城へ入られ精長不
降て義元の忌隙と由侍あれは是の居居も信 永禄二年庚申
五月十八日 是晩 是小大言の城へ入らせられたり 去程不今川治助

方丈系元 禪界玩小成りある出馬小夜宿り五月十二日小夜河
と申す人々 兼て用意有るり不化念院に良志の靈物
申す人々 兼て用意有るり不化念院に良志の靈物
かりり先夜河惣社大田社の山小夜宿り白狐有る生
け社小夜宿り老若れ白狐と云ふ時、形を成 就世信神傳
へと云ふ 及び小夜宿り六月十日 白狐有る社に死すま
六月二十の夜系元宿り小入てまるとり 多少小何やらん物有る身
小入て 忽ちまるとり 石塞り思ひて 根子と何れ小二の夜花留り意
云々 大坂の女の声あて小歌と云ふ 声志り此 詠歌受ひ後
者と申す 出されし小夜宿り因縁介の 燈の小念在京進 次小者り
元の宿へ出り 系元公の くるりの 園に宿り 怪物 小夜宿り 五紙

根子と何れ 是 在京を 股立 唯一人 声と云ふ 小夜宿り 十人の
妙の 声と云ふ 柳と云ふ 又の 果と云ふ 悲し 唯一人 在京路 次
戸と押明 されし 何れと云ふ 正しく 今と云ふ 人声と云ふ 唯一人
又五月十日の夜 風流 唯一人 宿り 根子 根子と云ふ 元
此 根子と云ふ 柳と云ふ 又の 果と云ふ 悲し 唯一人 在京路 次
法師 諸君と云ふ 者系元 公云 傷れ 良志 小あふ 小夜宿り 眠り 意
推し 兼て 此 夜宿り 云ふ 小夜宿り 子 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り
名と云ふ 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り
りり 仁心 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り
小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り
終時 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り 小夜宿り

と改めて味分河の家と安し流へとす元眼をいかりし確とみよと
由道ハ元不仇ある方へ我出と怪之し良美云何を度多し此詞を
後多ク家業承継ある家勢改んたを悲しむと元方不怒り
枕元の松念心の右方と振て切拂ふ露芳五段と切めく潮をよそ清
多そり元通方より汗と流し豊肥給として居給ひしと後
誰よりと嘆泣へ奥山松夜又九出り水と乞て又枕元を伏し
ケ林の怪美方より元より雷鳴左永祿三年六月十日渡河の
留りしは子息氏三小吉母を流して流をよそり并立りしと先原心
を召并伴谷人救り并伴佐虎守並望三別家務城より徳川
義人元康公の由家人之助合を斃り四百六十余人並寺の城
少は佐長の揮北多不葛山掃屋守長喜三浦在り并義就佐尾

豊前守形意淺井小四郎政敏澤田掃部介又重今川中務通
茂季小八子人日十七日元之勝元尾別也智郡當掛小吉陣
是相三十分當掛と并立りし日玉小助の軍兵在山口之初皆元
元へ馳奔在深大軍小成相十九日元之先陣并伴佐虎守並望
徳川家の由家人惣清小揮よせ二重三重小五かこし散りし事有る
城乃昭尾進は合刃限汝城固言葛の家を当途に防り此人多勢
小吉勢不叶して夜不入て居るは流り九根の城とまゐる城乃佐久居
又季季の如き山田友九布疾絶を飛して防り多る是等の士大將
松平吾郎并政親言力新九布重重公元又義木門降きて討死せ
給は是流勢少も名れを安や声を揚て進め城乃佐久居大守を
討死りれを惣不居城を討死元之勢ひ中地城より如く竹と破り

一

三河後風土記正説大全卷七終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

三河後風土記正説大全卷八

信長鳴海出勢

去程不義元尾別小責入て攻れハ必落致ハ必去務ク多程ハ
玉中影小五辰動して或ハ能病弱ハ義元不従ハ勇死方ハ身
限レテ忠と雖も加減田方十七城落入しハ今川方津信小宗
て信長と討ん申進取方有と勇ハを玉仍て松極言事為友取
より大言兵糧入の事河を正といハいハ小と誓うる事又ハ山口原馬
助江家同軍内以言取説之故中村鳴海の助成と義元へ事言
取鳴海の城ハ任思取之ハ信長怒小入替りたりと河を門切也
勢ハ津久根の由然ハ井伊徳川の為不義元落され依久月討死の
中若くハこれハ尾別清洲の城中五辰動して吾方支之の故

子之孫長信長ハ孫長也欺謀計方々大膽不敵大將ありて
織田道行元信房足家等より兵を深田出羽守政信内務
成政池田元信輝ホの諸老臣を招て軍を評定し及ハ
此を大敵と申す事加り我居るべき所にて敵と討つ味
方意責教せん信長自身死向て唯雄と決せん強け口面
自ら強きて池田元信房足家長門守貞孝
長谷川橋本助好秀佐橋友貞世山口元輝守江加藤
宗女正毅曰平治元信河原右了元徳和口與高橋若
築田出羽守政信内務成政池田元信輝は別依
本加勢前田右馬介兼利乾兵衛助實教織田大隅守信房織田
四郎三郎信実ホと初とて我もくと馬よ上り上り志あふ

此子三百余人を誘ひ信長ハ茶畑と遊んでおふりて我々の
宮に籠居りて此の如くして遊んで人殺し子余騎放る
子此百騎を成信長獲田明神と相せん馬より下りて池田元
信輝佐藤林佐守守りて其の如く君はあつて相せん
少や敵ハ糧の義元大軍より南へ寄る味方の諸將を責
罵し獨り余りて味方小勢を云々大軍少少志して信房
心の甘き勢を責罵して皆棄てて去りて是の如くは別依
害不捕獲を守りて賢くして皆棄てて去りて是の如くは
小振兵と乞ふひての如く一戦後へしと云々信長同心を
分遣す小陣あり味方諸將の兵を捕殺して信長ハ其の如
軍子少志して兵隊より乞ふて二部等も敵と相代小和守を

まんま上城小宮をた依る武勇のかんぞ思ひもみれば時ハ取
へき味方なく共相こころを教ぬれば必定之命を惜しむ様にして
攻殺されて亡ひんやうあけとも大軍小向て討たれ將る者ハ本
座へと社移小向て神ハ人の跡ふよりて威を揚し人の神の意ハ
依て運之は幸苗社ハ日本武勇の荒ゆ魂之時よりて形を
い力あり一雨ハ形書とあめさるへと武井此後入る夕度と呼
出ハ一匹の形書と認すも夕度別澄ハ川谷より矢立五匹出只
立移小水と流をめぐりしと認別福多小巻を富多小御と交
神夜鳴動して獲樂の音し又あめさる深白ゆり方便者法念も
と席して心鬼れあく勇進ハ誓田大明神意護り上の歌百葉
勝ぬた意も小せんは法軍の此むと見え信長ハ旅と進めしるる

溪のより湖滿て人馬ハ通路極るぬい。美守の東なる閑道とホ
て時居て小こめをさる軍兵方と行々し。台照守の東小島とる
山の横りあて勢掃へ者 子十 此時信長軍人佐正通子秋四郎
ちよ布文と招き。此小島人信長小一命と号するへしや兼ての忠
と知。あふけす。下をさる。あ人司と掃へん。一命とハ君ハ
まぬり今更何事ハ依て。小島信長と信長とる。我
機密をゆハふへし。今日明神ハ加護あり車輪の云。能て凡ハ
と多ハ信長退て考る。不認ハ今朝勢津丸根の城まで力就し
人馬ハ。上と。此軍ハ。將を。士卒。念らん。必定之
軍ハ。不。討。利。あり。信長。小。勢。を。討。た。る。思。も。よ。ん。は。沙。比。と
是ハ。も。い。ま。ぬ。を。教。て。ハ。軍。乃。と。傳。ひ。て。美。元。の。本。陣。と。亦。傳。り。十。死

一軍の合戦せんは去秋大軍を此の勢を分たは謀成難し商人
信長の旗下と押立義元の先陣流山の際小陣を有る今川勢も
責めたるは折柄風を志し陣形の先陣礼立人待た後陣も助
きて致して小松小次郎の旗元と遮りて十分の軍とせん去秋大軍
おれ各の一命おこつても助難かりん候し是と訪ふべき也と商人云
主厚りや時臣死せるは常なるに中心おくれは旗元も信長洞
なりし馬官と交へて姓を教ふるは時臣を多兵子六百人と稱し
信長従へ候る之子六百人と商人小振付て是乃に士平小次郎と傳へ
の旗を後へ腰刀を隠し書と紙ありて馬の古と後へ不鳴林に
て早し進んで敵の屯る山の極より押立せしと勇立て是れ果あは
築田政保佐尤も敵の助に候。城を攻め陣を改むは中候は是

押立ハ敵の後へおるは義元と討ハ必死をせん多死候と押立ハ
其の夜おれは及の夜まで早めしりと為兵と山小隠し候る秋の
一戦と訪れりる小風あるを是をたせし
去秋小次郎義元の尾別小次郎入替破竹の如く信長と臨陣して上
洛せんを勇まれりる十九日の夜方大風大なる家よりして陣更向風
おれ是と凌んと義元と初軍兵大津幕とたれて是を防く如
き夜ハ時臣風も此よりりる又時方大風あるは此のおまじも
その下も遮るありし海橋接ぎの内田兵久係とて少きよ一而之
時時義元の旗は止せしり此の如くより候しのを物言時多物と云散
為意してそ飛られりるは永禄三年六月九日の朝まう、きふと兼て
討死と誓ひしは佐々木人正通千秋等も是れ今時分能ぬ

さて信長の此の致する旗志先小押立を今川の先陣葛山掃平
守長共金井俊中守猪森道永佑孝守氏重ホ一万余人して陣
立る所深山の隙小押立て岡の多しと揚る吾や忠煙を立て一
文字小池入り今川方少は小押立信長逆寄其へしと忠煙もよき
事之りれ、折る所給合を喰て陣以れ侍しては何事とらうと
くを信と子秋信とや、而して百子の喬井屋をめぐり、妻立の怪卒
頼人らとて近敷る小面、素肌少つな馬法を以て或は刀一
ツホ、おん三人を射うる、而して突伏切せ、立横を下り、妻立れ、
今川家一万余人、一戦不利を多し、立是も、かくは是は、此時義元、先陣
へ、信とて、云、信長出るとして、先陣、彼を、と、義元、叫り、と、突て、妻の
虫死て、刀小入、め、如、ぬ、東、越、軍、地、向て、折、殺、せ、と、下、知、ま、れ、諸、將

是と聞て、初、と、近、け、り、と、中、小、羽、比、宗、小、三、命、康、秀、唐、原、右、近
忠、康、三、浦、右、馬、介、長、務、ホ、一、帯、不、死、未、て、十、重、井、重、小、押、立、圍、火、水、小
あ、れ、と、妻、立、れ、在、元、東、討、死、之、相、し、る、織、田、方、此、兵、在、少、も、勝、せ、
お、ま、り、小、掛、て、一、是、七、月、と、攻、戦、不、相、比、宗、唐、原、三、浦、未、敵、小、押、立、
物、し、り、信、長、と、撰、討、報、せ、**武、者、小、月、**と、かく、へ、り、大、將、と、勝、家、小
世、と、報、不、知、し、る、左、子、秋、信、と、小、月、と、を、そ、と、ま、不、死、と、あ、り、と、可
宗、人、公、也、見、此、討、立、命、傷、之、十、秋、も、信、も、七、少、も、石、志、隆、勢、と、隆、之、事
り、今、廿、三、日、新、野、を、う、り、不、つ、け、馬、多、小、川、更、突、立、く、人、多、知、五、之、功、
也、く、小、池、上、り、是、小、徒、不、藏、田、家、此、軍、兵、三、百、小、形、此、如、し、と、小、院、此
重、長、都、難、人、也、秘、秘、と、振、ひ、多、負、之、助、け、を、死、人、と、宗、新、迫、つ、
也、と、事、小、八、面、小、當、て、切、て、上、れ、流、石、の、三、將、搦、立、ら、れ、勢、白

お成て扱つた所不名実長守是言て其ハ味方上ハ強カク之
押立よ者大に二百余人摸合より突て入せ持八御て是烟を以て
戰へる流石名不あふ今川勢八百余人討殺され咽喉も亦奪とて
崩れて川近不度京原傳元政吉備武務守氏好乾安房守是部
甲斐守長定後枝仔賀守氏秋朝比奈之計以秀詮等今川家
宛竟れ極勢も亦討死んて人殺を迫り南麻竹草之五圍も亦
依り子秋山守室不名不取て之之突破てハ彼下不取れ子愛つ花
の御を振て其戰ハ大勢少之勢と云之者令誤りて其ハ千秋
四節右史良文傳之年人助正通山守室長守守室孝と初とて名之
手ん 乃公小坂左之勇士有権之並へて礼軍此中不討死也去初不
織田上從介平信長ハ凡百とも是れ也一子力百と云ふ者先陣ハ

織田道元九位房林信直も秀詮毛利勢助秀詮在麻之屋之可成中除
十一節位忠道山甚を而秋忠因河内守秋秀と云先不進也其是は
築田出羽守也是元の先子とて山岡の因乃之志也其不進也其是は
菊て園の声天地と動しおめ此叫て其戰不室中おれハ信長不
下知と傳へけ是と振され一文字不室中と云進んで志此お不
信長又下知し其ハ一戦ハ大勢味方ハ不勝か其ハ立不取て進めば
今川勢留と置ん馬流の若者食其先不進んで一戦陣を破り
終つハ其元の列伍死れて其捕人ハ其の由と云其も其も其も
其のりしと進む由不志其草此種不眼の向鬼の筋立其したる若
武者其も其も進んで大勢揚其因又其利家生年十八歳と名宗
下地入や其も其も立其不難其一人其依て其首と加さ其し 信長乃

以渠ハ傷之固め左のほうへ移る今川勢と東西に迫る事
小舟切て舟の隙なく息を遣ふれハ大船の在る事。知るに一分
く小舟で責め戦ふ小舟が音多急雨突々めく黒雲を催ひて雪原
の如く風烈しくして強河勢小舟向ひ面を折目小舟は咫尺を危
る事。名叶信長ハ陣小天の時と悟りて云へし。相義元の舟
陣ハ京徳酒小桐の基に攸折たるを張てそは底机小舟り
て大寺場殿ハ腹多の老勢と宗統ハ思ひも奇りぬ後照
責められハ海軍列を召寄へるに只一所小舟を掛りし門一所小舟
よ今暫し中甲の如くハ先子の勇士池田りて信長とみらんハ
まへこそ静れ心と静めよと声をかけして下知とる風を法
あももゆへと上味方ハ四百六十人定めて要害を防

戦はん小遙とて是長ハ是をいよりや討て出トも河原の大勢は更
先子の軍を助け金傷遠くおき左下知とも耳小舟少入喚地
叫てうらえ路く言ふ尾別河原の作人服部宗母と孫小服部
小舟を忠次といふ者あり心甲並く交者へこれいふれと孫小服部
おきハ大船と討て陣中も方へしと思ひこれいふか。と何ん可
京徳酒ハ油幕をひいて投上た方の陣と引提て因とる事
御威の強小服部ハ柳子小牡丹の裾合物をけし。折せ四方白の如
甲小合此形折てまを施の首と物 山おらちと名付る
左文字の力松倉の言 ちカニ振葉
して利若子地の兼記川をよめ底机小舟知つて下知有義元と急交見舟
道大船をも思ふれを腹折小舟を忠次と名乗掛一文字ふまはかり哉
とて少く実勢と義元をより極得ぬハ推葉と云ふなり。松倉のちカ

と搦て小卒を強奪しとす。しおちるハ名依多の因にさへは
首元より切られしはと驚き小卒をばはらして丁と切られしは
志うつらふに付られぬ。依多毛利勢助はさへは遊にきて後
より義元の服をばはらしてはらけり首を突かぬ。義元の痛を
おれはうんとのうらみとて首を切られしはと驚き義元首を
ちめかせしと志うつらふに付られぬ。義元の口の中へたの指を
不義元は切られしはと驚き義元首をばはらしてはらけり首を
歳に切られしはと驚き義元首をばはらしてはらけり首を
小卒をばはらし某の強奪しはた義元の首をばはらし義元首を
ばはらして首をばはらし某の強奪しはた義元の首をばはらし
義元首をばはらし某の強奪しはた義元の首をばはらし義元首を
ばはらして首をばはらし某の強奪しはた義元の首をばはらし

状を不備して時を獲るをうへ今川勢ハ大將の討死も不知して
喚び叫んで戦ひしは信長ハ林佐後守を呼出大將討れしを不知
して今川勢は傷をばはらし戦ひしは時を移しは義元の
大軍は谷
せり戦ひ必味方お負へし信長ハ義元へ首をばはらし付
取小卒をばはらし追奪せしは信長ハ義元へ首をばはらし
とばはらし小卒を毛利勢にお討たしは義元ハ義元へ首をばはらし
さすお救せしは信長ハ義元へ首をばはらし付
力とすは必味方お負へし信長ハ義元へ首をばはらし付
とすは義元ハ義元へ首をばはらし付
佐原守と討たしは義元ハ義元へ首をばはらし付
中少将各勢はうらみとて義元ハ義元へ首をばはらし付

返すべく忠おのりて、而も百餘をちりくふて、渡河して、
返臨く、交りて、こゝに、近合討伏せ、其の、元の一隊は、柳原
高内少輔氏政、久世中内氏忠、淡井小四郎と、初として、士大將、而も
あは、三浦康高、小笠原康元、吉田武敏、守氏好、葛山
掃磨、寺長喜、乾安房守、江尾氏功、少輔親良、伊豆権五、元利、忌部
甲斐守長定、彦持、伊賀守氏秋、朝比奈、且中助、香取、女房、掃部、
利虎、唐系、右近、忠春、同、初、監忠、徳、同、長、而、忠、良、年、礼、水、正、恭、慶、
西、内、務、佐、佐、雄、為、協、佐、理、元、敏、松、平、橋、津、守、誰、像、富、永、伯、孝、守
氏、敏、同、伊、原、光、匡、松、平、兵、部、少、親、將、温、井、内、務、少、実、雄、松、平、治、右、衛、尉
田、比、原、守、正、信、石、川、新、左、衛、尉、康、重、関、口、越、中、守、親、將、并、伊、佐、徳、寺、正、盛、
清、田、左、衛、尉、将、進、飯、尾、右、衛、尉、原、義、次、田、長、門、守、忠、義、尾、崎、十、三、郎、忠、実

上和田雲平元龍、合井主馬、分忠、宗平、山十之允、乃、仍、息、長、康、吉、信、長、以
平川左衛尉秋廣、福平、且、親、少、忠、重、以下、随一の侍、而、半、三人、其、外、の、討
死、部、合、三、子、九、百、七、級、風士元并小藏田軍元
小ハ二十五百余合者、其、外、の、而、も、淵、名、渡、河、以、常、親、龍
朝比奈、伊、守、恭、徳、同、小、三、郎、恭、秀、其、外、の、元、の、討、死、小、部、將、一、と、平、合
戦、の、中、も、勿、く、皆、く、渡、河、入、迹、而、九、沈、鯉、鮒、皆、掛、勢、津、九、根、等、の
城、を、取、り、而、も、一、戦、也、と、不、及、皆、城、を、控、り、て、渡、河、の、玉、一、迹、而、る、在、今、の、
尾、列、の、中、ハ、名、部、少、右、衛、尉、長、重、の、跡、り、と、る、以、海、の、城、神、君、の、跡、と、せ
と、大、意、の、城、北、ハ、皆、信、長、少、を、従、ひ、り、て、藏、田、信、長、公、ハ、十、分、小、討
務、跡、小、親、將、合、川、義、元、と、討、死、り、九、百、七、級、の、徳、軍、小、合、し、と、如、ふ、は、偽、と、云、ふ、也
撰、田、の、社、と、川、返、し、首、実、在、事、終、り、上、下、略、少、事、限、り、し、

山蛇又松倉の右、ハ、今、川、家、社、主、の、名、也、也、伊、佐、徳、寺、正、名、也、也、

兼久の時八幡宮又雲夢を其母切本切と兼氏小治の是と今必祖
長氏小治の長氏二振のち方と中城八幡宮を奉納有御心儀と
稱長は世入道了依九別揮の時右方小日君の中治也其
後二振は是蛇巻身て又中不寸昔時多田藩中城三の三歌
去山の瓶治小命して依れぬ其切鬼九又柳子の子友切の
左膳九尺
あり非せん 蛇切吼九海の海縁と云
右岸の兵庫澤の古口今小
箱根の古口各異伝多 膳致不平右
後定正次は勇と大治八高志とて九別小位へ毎回誓ひ成子孫不有と云
室不呼海の城の兼元の追多防定致を命し長教との為成りり別不
是致家臣と存あり中りのハ物も我君兼元大軍と治河と出尾別不
在て小と動し候者と即時小責致さんと云ふ事位長治勢との味真此
建めと云ふし經兵と云ふ責来て主将兼元思の印小討死ある事

神運の傾成存云なく事小念念此亦其の朝比奈と初として日治は
鬼神もも呼れる面も兼元の討死小碎り易して大軍此川連をく
はせしる事もあとおれりて逃退し中城の浦治もあつて日治は
中治小云甲此をあつて是とて長教不肯の才たれ何ぞ君の福を
合はるる事小只サマ下小退へまや然史日治くく考ふ小日今と云
中城と云ふる分れ依令諸藩ハ退ても長教小治てハ此所退まし
終り兼元来らん必定之とき時中城の幸なれ城の中分安て出
馬小神職て花や小討死せんと思ふに命惜く人々ハ少も不若
里々部の方来ざる内不とく城を治りてし柳根と思ふへん
中り兼元兼元と云ふ世にハ勇を治之誰一人も辞退まはれ事小
潔然神志我も同く討死して忠と白承下小報し事今一神水

と吾人の城兵三百余人 欲す妻小の花やうに討死せしむるは
去程に佐々木が旗本に在陣まじりたる佐々木右衛門尉信成を招き
宮にいらるに我計らるも 欲す妻元を討捕とて玉中首を定て陣取
乞成ハ城を捨て 後河へ逃ゆるも中より 呼海のあゆみのいまだ
原をの沙汰も呼へん 大言ハ元元の信代小あし 氏多小信を 陸下徳川
義人おれた 妻元元を 欲す人 殊も多年に仇を此の 築田出羽守河原石馬
允加及 室女四子あて 馳向たり 呼海に 城守 義元 息 勇士 是 欲す 妻 元
指 欲す とい 中 へ 後 集 事 へ 妻 元 非 出 陣 千 余 人 の 兵 二 日 卒 して
彼 亦 小 攻 事 是 欲す 討 死 者 此 下 知 志 小 佐 久 君 別 命 とも 定て 池
向 小 是 欲 捕 せし 欲 小 旗 本 追 討 とも 定て 欲 取 不 事 とも 定て 下 知
と 傳 へ て 討 死 する 佐 久 君 人 數 遠 也 あり せし 揮 奇 園 とも 定て 不

城 中 更 小 事 せし 妻 元 相 小 是 欲 する 元 大 五 毛 孫 小 不 叶 迹 する せ
たり とも 定て 中 へ 討 城 へ 一 番 小 宗 入 陣 とも 定て 下 知 志 我 たり とも 定て 石 垣 際
まで 揮 奇 せし 佐 小 城 中 金 部 とも 定て 呼 小 園 の 声 とも 定て 元 とも 定て
大 本 大 石 雨 散 小 如 く 投 出 死 する 兵 小 約 泰 信 小 亦 信 とも 定て
悔 する 織 田 勢 とも 定て 中 へ 妻 とも 定て 小 文 字 小 訓 とも 定て 同 記 是 欲 する 勢
莫 難 小 信 とも 定て 五 毛 元 進 へ 陸 下 五 毛 元 とも 定て 振 起 主 小 主 小
為 小 討 死 する とも 定て お せん とも 定て 志 とも 定て 小 愛 とも 定て 初 小 欲 とも 定て 悔 とも 定て
悔 とも 定て 小 佐 久 君 兵 小 元 とも 定て 呼 とも 定て 呼 とも 定て とも 定て 追 とも 定て
あ とも 定て 踏 散 し 妻 散 勢 合 とも 定て 旗 小 電 光 小 如 く 馳 出 とも 定て 佐 久 君
陸 下 欲 する 事 あり とも 定て 迹 追 とも 定て 佐 長 とも 定て 出 志 とも 定て
中 へ 討 死 する 佐 久 君 討 死 とも 定て 佐 長 とも 定て 佐 久 君 討 死 とも 定て

招て軍北次中と詳小石原不き兵の進退獲ふ事なきと信るが如し
信長に之を誠不万丈不南の勇士今元討死し依て諸士日頃の
勇気と成事申不事不存して少も居せよ武勇と振て敵兵と
くらうそ忠烈感感さる不金不者信長何そ情を思と攻殺さへまに
築田出羽守と呼出し汝人殺す子を引率して彼向し必合戦
廿八和勝と云流ひて城と語えへしと下知と付へらるれは築田別
馳向て和勝の義中道不忠誠心の内ハ氏真の甲合戦あらん
討死せよと思ひて別件ハ執事知は終不南城と記す此後
一市ハ去主人義元の尸ハ只略取の白骨と成て取馬の蹄不
汚されし中流石原をこの事と此むくらと大急の同合と成る
中略取の事ハ思と終り諸河へ取扱へし虎もあくらむ一人

より敵も明海の城と款。こ字不逆退しと武士も亦亦互切り
されし以て城下を承引付しと返さるは皆中を亦亦信長は固
部ら忠義と感心考て別義元の遺骸と亦亦傷う方へ棺不入送らる
亦云是部以上不金某織田居の大將不為し 勝利者居しと
存せ居らるる主辱めらるる時ハ臣死せしと云ふ一人の首級と不倍
を南城と推して義元黄泉地依と社存流ひひぬと中送らるる事
依之是部亦して義元の死骸と明海の城と引替として掃く是
退ぬされし今川の諸士多き申不忠誠一人款不和と云せ軍士不
も不散して本玉へそ仰りらる形て之別前居の城下と互戦する時
長友臣下と集めは友味方大將被れ殺む敵軍不及しまくは城も
空て沈み去へしと上城に水理信元の事 信長陣不亦亦居る

廿あての義元の象下。忠義小付城と書き居りて向うんを長谷組
伊加多忍此者數十人の将卒百余人を召居りて城の深きと押寄き
風より火と付これに於て浪風流くして余煙城中へ吹寄せに極大
あふれぬる時城中の兵も多く信元百連て城は水腫後九郎
政信水腫馬と召居る二百余人御主より召居り今川義元討死在
餘兵多く居矢より城の形を以て城中より大方向にさし入
兵多し城と出で居る討死を以て出でぬれい言ふ所をさし入
居居る兵百六十余人甲比留と煙火を以て揚げて煙兵多し
責をとり水腫敷るを以て浪のより書入歌を防く所を甲比留
押入り圍て終小を討死を以て書入歌を以て防く所を甲比留
改位禮を以て肩小投を討死を以て書入歌を以て防く所を甲比留

今川義元は美哉なりとれ在るを此の人数少しは煙小巻を以
るに思ふ程戦ひて乱軍中を討死を長谷組忽城と書きて後園向
けて押寄りて水腫の家臣小冊玄蕃多人殺討りて千人と引連てとさ
とんと池事あり居居り我の人数を以て城の形を以て防く所を甲比留
引入りて人数を以て書入歌を以て防く所を甲比留引入りて城を守
る所の形を以て書入歌を以て防く所を甲比留

去程小付時 神君は大意の城小水腫は成義元守て尚城へるを以て
本陣小付は城は必死に我が丸小を以て討死を以て二の丸へ退入り居る
しつるへりて 甲丸少は大本幕并を掃除位付られて二の丸小付傷
者多し義元の討死を以て知りて召居りて小付日の曉に方何者かなくひそ
く今川義元討死を以て今川督級軍政出する 叙言にこれ詭家老

時より言え思ひぬ人を出して極めを伺つて可く交加すべし風説
影へ依り酒井勝兵衛改親石川本藤吉清兼河井將監忠尚酒井
左馬尉忠次本兵衛評定して風説を極め之中若しける事実なるは以
介此西大寺時義之布上先皇孫へ由城を奪はんとて由義へ
由る如く何れかやと西大寺分四人相と極め今皇今川及信長討
走めひ後河野勢義徳軍のよし風説は若しける事実なるは信長死
系して南城へ去る来ぬは必定之を時相防戦守城中兵糧乏
そ上款ハ自水少て事用乏味方ハ助兵かりぬは是長久の謀不忠
欲不乃と云切らぬ先皇孫孫へ由城を奪はんとて中上公曰夫ハ
大寺之誣ホハい成事不ずりつる凡人と申へし世人誰か極め急
承るるも申さずもかくりて凡人事ハ風説は左部申上りてと公完
爾

又由美方て家の中を假せ至由美方是を率忽るると申す
ケ極の中ハ極め此難説多知物なれ款万君いと入義元討死也
由虚説と云ふるも有へしそを偽とて得極めすやれ義元討
死すと云おちして云物も此難説多知物なれ款万君いと入義元討死也
あて義元討死の時ハ凡人の指印ハ極めを更暇病者の急を流して
生々中ハ極めすも然して元康存亡とも寤へし又此中実中して其
由小位長由城へ寄来りハ惡犯要害を便わして花や又其戦陣
取小討死して義元の孝忠小致せん小何事子母有へしそを偽とて
流石此酒井石川七赤面して由美を退れ只必死の覚悟を寤めり
然るも其日の事多し不た其城を極めし事位は若しける事実なるは
小酒井石川此人ハ小由美城にこそいふ所不門の潜り入れはあふ

討死しては手扱ておしる事なり此は作爲の事なき事也
後見の事なり又作爲の事なりと信じて諍る事似して諍中なる事
和君の事なり又作爲の事なり石川を七命後日の不測法は切腹と思はれぬ
御事の子玉三浦上野守保佐尾孫次郎秋元上下百余人をて多額の
城より退きしは信方急定城は引退の上は元康公も是後(市馬
と入れ申侍者へ)我の諍向(立御)氏公の佐仕迄(美元の甲合
戦)お出さして是時先陣の事(申)申して是日(只)死をりしと
申上(初)作爲の事(諍)云々大方(申)申する事(申)申す事(申)申す事
分る今川方(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事
法(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事
辱あり心静ふ事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事

まゝ上座の君は掛物とすけ花を生み月九日の夜申す小大言より
是後の方へ退き給ふ事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事
まゝ(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事
汝(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事
て兼て信(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事
て退(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事
別(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事

用運福語運記は水陸下冊守より法井といふ城と云運
記(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事
不(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事
新(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事(申)申す事

して争ふ事なきや、此の家一人何事へも成りむと、思ふ事なり。

是も不審、此代この山城を治むと、控へ何事へもと。

日従の縁子、此を成り事なき事、此も志の事、成り承く、
武士の佳名と、おぼせしと、成り。

是も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。

へ、此も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。
人、此も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。

大御君の、此も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。
あり、此も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。

心、此も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。

是も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。

別も、此も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。

別へ、此も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。

大蔵、此も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。

初、此も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。

形、此も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。

人、此も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。

公、此も不審、此代、此の山城を治むと、控へ何事へもと。

小んちの助松明を言々見守り送り目をして、松久し、其の終此道
有と名て先の松明を、目小教へ、是小隨て、引し、之宮ふ、是又押り
人形の中百騎、毎小馬上、兵長松明を、目上、後陣の、目下、之せよ
之介、此物、ハ、松明を、扱へ、引と、依て、三子、余務、中、お前を、宣て、祈
之、小、是、若し、認、小、名、を、て、同、士、并、させ、ま、し、地、方、之、又、將、亦、小、引、り、付、は
先、子、へ、言、む、兵、隊、を、一、人、長、松、明、を、さ、し、け、り、必、小、馬、と、扱、は、知、堀、沼、谷、川
方、向、を、以、公、軍、兵、小、隊、を、成、へ、ホ、し、て、引、引、を、令、て、過、り、池、鯉、鮒、を、出
多、少、小、明、士、の、以、之、を、小、引、居、道、也、上、田、中、六、極、咽、て、進、ま、之、如、の
忠、告、也、何、り、付、時、進、陣、の、血、氣、ハ、若、者、腕、之、の、如、京、を、百、集、也、評、定
し、ら、り、ハ、傳、り、鳴、海、毒、の、戦、小、今、川、美、元、藏、田、屋、の、為、小、討、死、者、後
河、筋、を、小、成、り、進、退、之、是、我、々、幸、之、後、武、を、不、成、れ、い、ら、成、印、の

兵と為れ、秘事も、若く、之、は、之、也、也、何、小、波、更、新、而、不、支、て、後、人、の
物、具、之、も、之、を、ら、ん、若、し、供、合、能、付、一、方、此、大、明、を、も、お、取、入、へ、し、其、時、お、は
信、長、ハ、信、を、し、て、俄、大、急、を、あ、ら、ん、あ、ら、な、げ、な、れ、之、の、少、く、是、お、あり
と、痛、吹、流、疾、炮、竹、砲、砲、杯、用、之、を、數、百、本、紙、旗、或、ハ、竹、子、を、懸、を、
よ、し、是、と、言、て、之、を、夜、の、子、此、刻、引、小、お、出、り、公、ハ、淺、井、ハ、安、内、也、池、鯉、鮒
此、狐、小、當、り、後、引、一、足、も、引、く、と、標、小、お、ん、て、急、を、多、少、お、前、小、ハ、送、母、其、重
く、小、川、橋、へ、數、百、の、旗、之、を、連、ぬ、自、見、並、へ、て、羽、衣、懸、を、毎、之、懸、て
後、方、へ、り、只、今、公、此、小、人、形、而、お、折、れ、難、也、と、斬、り、子、辛、苦、し、て、お、其、人、
見、る、ま、り、し、合、意、の、を、能、と、お、立、固、代、声、也、之、揚、言、か、り、京、螺、を、吹、て、
一、揆、急、起、立、て、後、人、の、物、具、を、げ、と、引、め、起、り、神、君、の、先、を、ハ、石、川、宮
藤、原、清、兼、お、多、少、お、前、也、忠、告、を、承、り、お、出、り、り、是、と、言、て、物、小、家、難、人、京、此

昔は人々を侮り怪我捲かたり遊覧して居るが如しと兵と備出
まんと出ると水野の家人淺井六之助等と押合ふ者居り此等
かういふ時夜に獲ると淺井六之助等も其上人も兵糧を
居る暇なれば日頃ハ此等いふ時一撥と強合戦いふ小村屋の
城は水野屋九郎加流の城なり九郎屋の城は此の城なり 寺へ出入り必死の務りハ
應れ難しといふに此城は東を向し皆北を向し何れも其何れも
謀りて居る人相別れれば石川平定親角の君は此の城を擧げ
相討つ危うなやせりしも信長の下知しして御田守佐田義介が
河原左馬次等に加流宗正正元小四子余人を擧げて後向の不出早
元康公大言市岡城の跡に居る在城中に松子一し小川を止し毎火燈を
懸けし末をくくし過すし過すやまんなや何れ信長居るといふ御田守佐田

他年の仇之討つ矢の巻遊覧し討つ淺井六之助等早馬を擧げて
夜の宮に別れ跡と慕ひ追ひける人数は淺井六之助等知し居る形に
くだりし不道母本川除一撥擧げ公は市人数を討つに死かると
討つ浅井一騎馬を擧げと家出の是に家人して不道なり水野下野を
命と交けしと居る若くは味方をして淺井六之助等と居り上野六
何れも其の甘き事味方せんとして大昔刀を擧げて其の一文書不々事
水野屋の家人なるは上野六之助等を知りし其も此の何れも淺井六之
馬と居ると別れし松子の巻を擧げし其の上野六之助等心掛り
つれぬ事なれば是に水野の城内淺井六之助等が政次等が居るに
先して因甲と居る不道御田守等居るに不道六甲と居る其の
何れも其の政次等が政次等が我の小川等と居るして信長の加流小

更なる伝承に加護ありて我小作務相呈候へ是を以て是より
のありて候と云ふ

是甚る害之尾流小丁今我はあれ是後清城何れ也因之早

た今川之移居跡と云ふ也上小南家之信代何れ也是より

中事ハ云ふ事と云ふ也

上上氏之の胎之病と云ふ限り有て伝長へ内和彦之

物と云ふ記事あり 神君此由以いふ事より居神上勿辨多記す所也

三河後風古記正説大全卷八終

三河後風古記正説大全卷八終

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

